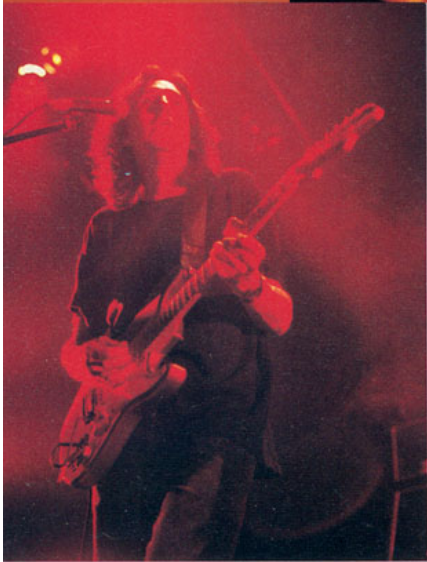


# burning water



Mitsuya Yamamoto



The  
GUITAR  
SPECIAL  
STAR

# an+thrax





デビュー・アルバムの発表からわずか1ヶ月余りで来日公演を行ったバーニング・ウォーター。そのお披露目ステージでは卓越したテクニックでアルバム以上のパワフル・パフォーマンスを展開、会場につめかけたファンを魅了した。名うてのセッションマンのキャリアを持つマイケル・ランドウ（G）とカルロス・ヴェガ（DS）を核とする彼らはベーシックなヘヴィ・ロックをルーツとして、オリジナルかつ正統派のスタイルを持つ数少ないバンドだ。デイヴィッド・フレイジー（Vo）、テッド・ランドウ（B、マイケルの実弟）と、若い2人とベテラン・コンビが織りなすライブ・パフォーマンスは、ビュアなロックのグルーブ感が宿った鮮烈なものだった。

達がクリエイトしていることが挙げられませんか？

デイヴィッド：本当にその通りだと思う。彼らはロックらしいロックというものにこだわって、リアルなサウンドの追求をやってきたから、バーニング・ウォーター＝ロック・バンドと思われるのが何よりだよ（笑）。

バーニング・ウォーター結成のそもそものいきさつは？

マイケル：僕とカルロスは高校で一緒にバンドを組んでいた仲だったんだ。それが発展して、互いにプロのセッションマンとしてこの世界に入るキッカケとなったわけさ。で、数々のセッション活動をやってきて、キャリアを積みながらも常に自分のバンドを持ちたいという希望があったんだ。何しろ、バンド結成は10代そこそこの頃からの夢だったからね。

持ちもあった。ただ、他のサポートिंगをずっとやってきて、いざ自分達がメインになるバンドを結成する時に、どうせやるなら妥協のないユニットにしようと思ったんだ。だから安易にことを進行させるんじゃなく、じっくり構えることにした。このメンツが揃っても最初の2年間は曲作りやジャムに明け暮れていたよ。

マイケル：正直、アルバムを発表してバンドを早いうちに具体化させなければと考えたこともある。実際、レコーディング中も焦ったりもした。ただ、今カルロスが言ったように、デビューするからには半端なことはしたくなかったし、自分達のやりたいことを見極めるにはこれぐらいの期間が必要だったんだ。

バンド名であるバーニング・ウォーターの由来は？



まず、初の日本公演の手ごたえは？

カルロス：自分達はとりたてて派手なことをやっているわけじゃない。と言うより、すごく地道に自分達のロックを追求している。今回のライブでは、そうしたバンドの姿勢を充分理解してくれたファンが集まってくれたのが嬉しかった。それにオーディエンスののりも実に良かったしね。

マイケル：素直に自分自身がエンジョイできたコンサートだった。今、カルロスが言ったようにファンののりもエキサイティングだったし。この充実感はやっぱりセッションマンの立場では味わえないものだよ。その意味では、このバンドを結成して本当に良かったと思うよ。

ファンの年齢層の広さに驚いたのですが、その要因として、ブルースやヘヴィ・ロックを吸収した「ロックらしいロック」をあなた

幸い自分のまわりにはカルロスやテッドがいたし、セッションを通じてデイヴィッドにも巡り会えた。今がバンドを結成するチャンスだと考え、現在に至っているんだ。

テッド：マイケルやカルロスとはセッション時代からよくジャムっていたから自然とバンドのメンバーになれた。当初はまさかアルバムを発表して、こうしてツアーに出ることになるとは想像できなかったけど、マイケルがデイヴィッドをスカウトしてきた段階で本格的なバンド活動がスタートすることを直観したよ。

現在のラインナップになったのはいつ頃ですか？

マイケル：4年余り前だった。

グループ誕生からアルバム発表までの4年はその準備期間だったんでしょうか？

カルロス：もちろん、早くデビューしたい気

デイヴィッド：実はバンド結成からしばらくはバンド名がなかったんだ（笑）。で、先に「バーニング・ウォーター」という曲ができてね。この曲は神秘的な架空の街をテーマにしたものなんだけど、同時にとてつもないパワーを感じさせるナンバーに仕上がったんで、いっそのこと自分達のバンド名にしようということになったんだ。

マイケルが中心となったバンドがデビューするニュースを聞いた当初、あなたのソロ・アルバム『テールズ・フロム・ザ・パルジ』（90）のようなジャズ・ロック・タイプのサウンドを想像してしまったのですが…。

マイケル：確かにジャズは自分のルーツになっているし、ブルースも好きだ。けど、あのアルバムは単に趣味的な発想でレコーディングしたから、そんなに重要性はないんだよ（笑）。

各自、どんなアーティストに影響を受けたのでしょうか？

**テッド**：まず、何と言ってもジミ・ヘンドリックスだね。あとはレッド・ツェッペリンかな。マア、自分としてはだれが好きとかいうんじゃなく、バンド単位、そしてサウンドを基準に聴いていたんだ。だから、ベースをチョイスしたのも特別な理由があったわけじゃなく、ただ音がデカそうだったから気に入ったんだ。それに酒がまわるたびにのってくるからね(笑)。

**カルロス**：オレの場合、いっぱいいるから名前を挙げるのも難しいんだけど…。ジャズ系のトニー・ウィリアムスやジョン・ポーナムとか、とにかくその他大勢だよ。ただ、基本的にプレイの中にも魂がこもっている人が好きだね。テクニックももちろん大切だけど、

ウェイン・ショーターなんかかな。わりとギタリストにはこだわらない方なんだ。トニー・ウィリアムスに関してはあの叩きまくるプレイがジミヘンのギター奏法に共通する陶酔感があるようで魅力だね。で、自分にもそうしたフィーリングが出せればと願っているんだ。

**デイヴィッド**：ジョー・テックスやジェームス・ブラウン、スティーヴィー・ワンダーといった主にソウル系のシンガーが好きだね。彼らが持っている、何かハートにうったえかけるような熱っぽさにすごく憧れるんだ。また、女性シンガーではジョニ・ミッチェルやアレサ・フランクリンの2人。タイプは違うけど、彼女達には独特の味わいがあるよね。

**マイケルのソロ作ではスティーヴ・ルカサーやウェイン・ショーターらビッグ・アーティストが参加していましたが、今回は曲作り**

ンジメントはカルロスにまかせてあるから、結果的には4人のコラボレートによって自分達のレパートリーが完成しているんだ。

**今後、バーニング・ウォーターはどんな方向に進んでいくのでしょうか？**

**カルロス**：とにかく、現在のロック・シーンは流行に踊らされればなしだよ。特にアメリカではラップが流行すればラップ一色になってしまう。もううんざりだよ。とりわけ、オレはセッションマンという立場から、あらゆるタイプのミュージシャンの作品に参加してきた。当然、その中には不本意なものもあった。それだけに、自分のやりたいことを冷静に見つめ、流行からは一歩身を引いた視点でそのことを判断することができた。もちろん、今後の方向性はまだ決まっていないけど、トレンドには左右されないベーシックな姿勢

interview

The  
SPECIAL

# Burning water

LAのセッション・ミュージシャンがまさかこんなサウンドを出すとは!?……

そう、マイケル・ランドウ率いるバーニング・ウォーターである。

彼等が早くも来日を果たし、ライブを敢行した。ラウド、ヘヴィ、ブルージー、男気に溢れたパワフルなロックをプレイ。アルバムもなかなか好調なようだ。今回は彼等のザ・ギターとともに、一流のスタジオ・プレイヤー達がこれほどに思いきったロックを演るに至った経緯などを語ったインタビューをお届けしたい！

Interview by YASUHITO KITAI Photos by MITSUYA YAMAMOTO

フィーリングでそのミュージシャンの姿勢みたいなものにじみ出てくる、そんな何かを備えているといった感じかな。その意味では、かつてのジェフ・ポーカロも偉大なドラマーだったよ。あと、オレとしてはプレイヤーであると同時に音楽ファンなんだ。だからロックだ、ジャズだ、ブルースだ、といったようにジャンルで音楽を聴くようなことはしない。全ての音楽に興味を持つよう心掛けている。だから、20歳の時フレディ・ハバートやジェイムス・テイラーと共演した体験が、現在のオレ、そしてバーニング・ウォーターに生かされていると思うんだ。

**マイケルのフェイバリット・アーティストは？**

**マイケル**：マア、ジミ・ヘンドリックスやジェフ・ベックは別格だけど…。そうだね、ジャコ・パストリアスにトニー・ウィリアムス、

**ヤプロデュースを含め基本的にメンバーだけで作業を行なったんですね。**

**マイケル**：もちろん。これはバンドのアルバムだからね。他の人達に手助けしてもらったら何の意味もない。それに何より、4人とも才能にあふれる連中が集まっているわけだから、敢えて外部の人間を入れる必要もなかったんだ。

**カルロス**：ただ、唯一の例外でレニー・カストロ(Per)が参加している。何が何でも参加させろ！とヤツが脅すんで仕方なくけどね(笑)。

**楽曲作りの方法は？**

**デイヴィッド**：大体がセッション中にできたりするんだけど、詞に関しては僕が担当している。あと、メロディの基本はマイケルが考え出してくれるんだ。でも、ここ最近ではテッドが1人で作った曲もあるし、リズムのアレ

だけは維持していくつもりだ。

**マイケル**：いずれにせよ、バーニング・ウォーターは、この4人が揃ってはじめて独自のカラーを打ち出すことができるんだ。だから、そのバンドのマジカルな部分を大切にしていきたい。カルロス同様、僕もセッション時代にはあらゆるキャリアを重ね、その中には憤りを感じる仕事もあった。でも、今は自分達のバンドを持って、妥協のないサウンドを追求できる環境になった。その意味ではとってもハッピーだし、そうした気持ちをよりクリエイティブな方向に発展させていきたいね。



Michael Landau (g.)



David Frazee (Vo.)

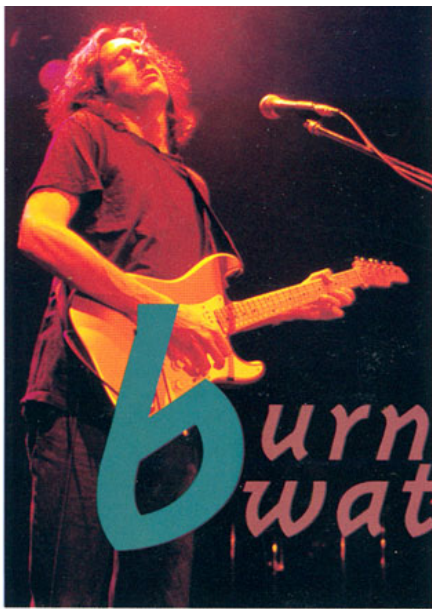


Carlos Vega (ds.)



Ted Landau (b.)





Photos by MITSUYA YAMAMOTO

挙げ出せばそりゃあキリがないくらいのセッションやスタジオワークをこなしてきたマイケル・ランドゥ率いるバーニング・ウォーター。その中でマイケルは、スタジオワークで聴けるギター・プレイとは殆ど異質な、ブルージーでヘヴィな、とてもロックしてるギターである。肩ひじ張らずに、されど気合の入った演奏を聴かせてくれた。ここではそのマイケル・ランドゥ、そして弟のテッド・ランドゥのザ・ギター&ベースをみてみよう。

まずマイケルのザ・ギター。彼は現在タイラー (Tyler) を愛用している。ジェイムズ・タイラー氏はLAを中心にギターのリペアやカスタマイズを手掛けていたが、「どうせなら自分のブランドを作っちゃまおう」ということでスタートしたのがこのタイラーなのだ。右の二本がタイラーのマイケル・ランドゥ・カスタムである。マイケルはかなりの本数のタイラー・ギターを有しており、仕事の内容によって使い分けているが、今回は彼が長いこと切望していたバンド形態での演奏ということで、かなりストラトキャスターに近い仕様のモデルを持ってきたようだ。ヴィンテージ・タイプと言えるだろう。ボディ材は残念ながら不明、メイブルの1ピース・ネックを使用している。クルーソン・スタイルのペグに、やはりフェンダー・スタイルの2点止めトレモロ・ブリッジ。ピックアップはリンディ・フレイリンをマウントしている。ハンドメイドのピックアップで、日本にも入ってきているが手作りのため少量。しかし鳴りはヴィンテージのストラト・サウンドを再現したシブいものだ。それを3つマウント、コントロールも1ボリューム2トーン、ピックアップ・セレクターといったストラト・スタイルになっている。カラーリングはフェンダーでいうところのハーベスト・ゴールドとシーフォーム・グリーン。グリーンの方はローズウッド指板にマッチング・ヘッド、他はゴールドのものと同じと思われる。

さて次は弟、テディ・ランドゥのベースである。彼のメイン・ベースはフェンダーのジャズ・ベース、ヴィンテージ・リイシューのモデルだ。アルダー・ボディにメイブル・ネック+ローズウッド指板。ベック甲模様のピックガードとブリッジもオリジナル。ピックアップはマウントし直しており、セイモア・ダンカンのアクティブ・イコライザー・ジャズ・ベース・システムを勿論ジャズベ仕様で搭載している。これはピックアップの右についている3つの白いミニスイッチでフリクエンシーを変化させられるもので、ウォームな音からブライトな音までをピックアップ自体でコントロールするとゆーやつ。それに併せてコントロールも変えているだろう。2ボリュームか、或いは1ボリューム+1ピックアップ・セレクター。色はレイク・ブラシッド・ブルー、なかなかシブいベースですね。



Tyler Michael Landau Signature

小さい写真のほうは兄ちゃんと同じタイラーのベース。ボディ・シェイプは'52,3年のオリジナル・プレベ、俗に言うテレキャスター・ベースのスタイルとなっている。カラーリングは2トーン・サンバースト。テレベ・タイプの大きなピックガードが付いている。ボディ材は恐らくホワイต์・アッシュだろう。メイブル・ネックにハリメイブル指板。ブリッジはノーマルのフェンダー・スタイルのものだ。ピックアップは先のジャズベと同じでダンカンのアクティブ・イコライザーのジャズベ・タイプ。



Tyler Michael Landau Signature



Tyler Ted Landau Signature



Fender Jazz Bass

アンプ関係も見てみよう。まずマイケルのほうは、マーシャルのヴィンテージ・タイプのヘッドにキャビネット2台の3段スタック。それに加えて今注目のマッチレスD/C-30を2台と拡張スピーカー・キャビネット。その右の3Uラックにはブラッドショウのカスタム・オーディオ・エレクトロニクスとマーシャル・ヴァルブステート、レキシコンのPCM60。メインのサウンドはマーシャルのほうで出していたようだが、マッチレスのほうではレキシコンで作りに出したりヴァーブをヴァルブステートで増幅し、マッチレスで鳴らしたりもするなど、色々サウンドの工夫をしていた。ペダル・エフェクト関係ではアイバニーズのチューブ・スクリーマー、ロジャー・メイヤーのグードゥー1、オクタヴィアなどを使用。それらをブラッドショウのスイッチング・システムに接ぎ、多彩なエフェクトを容易に出せるようにしている。この辺りはさすがにスタジオ・ミュージシャンらしいアイデアに溢れているといえるだろう。

テッドのベース・アンプは逆に至ってシンプルだ。カスタム・オーディオ・エレクトロニクスの3チャンネル・プリアンプ、VHTのパワーアンプ、そしてトレース・エリオット及びアンペッグのスピーカー・キャビネット、兄ちゃんに比べてまだまだ経験の浅いテッドであるが、ベテラン、カルロス・ヴェガのドラムとともにヘヴィなボトムをしっかりと支えながら、若さに溢れた爽快なベース・ラインを弾き出していたのが印象的だった。

さてこのバーニング・ウォーター、既に同タイトルのアルバムが発売となっている。ジミ・ヘンドリックスを思い起こさせるヘヴィなロック・バンドである。まあメンバー4人ともにセッション・プレイヤーであり、今後もお仕事か忙しいであろうが、このカッチョええ「バンド」はマイペースでいいから続けて欲しいものである。そんなもって、是非ともまた来日して欲しいもんですね！

